

(Japanese Academy of Learning Disabilities)



日本LD学会会報

第34号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内

〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギショウビル2F TEL. 028-649-0090 FAX. 649-1213

URL. <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jald/>

児童相談のなかのLD

弘前学院大学社会福祉学部

齋藤 繁

だいぶ以前のクリニック、児童相談所などの話になりますが、MBDは脳障害のうちでも軽症とみられていたので、文字どおり、通り一遍の取り扱いで済ませられ、脳波所見から「びまん性脳損傷」と診断されると、多くの場合、ろくに処方もされないうまま、家庭、学校で留意して指導すべき子どもであるということで、帰されていました。親たちにしても、診断名から、まあ、たいしたことはない、加齢に伴い、そのうち収まるだろうと期待して、再来することすらなくなるというのが実情でした。

びまん性脳損傷から微細脳機能不全へと診断名が変更される様になっても、学習困難ないし学習不適応、一次性行動異常（行為障害）などの社会的に不適応な行動の対応の方に人々の関心が集まり、それが幼児であればなおさらで、とにかく片時も目が離せないこと、さらに小学生であれば、他学習者への妨げとなる、今で言う学級崩壊の元

凶にもなりかねないので、というのが実情でした。とにかく、余り人様に迷惑をかけずに、おとなしく勉強に励むようになって欲しい、これが親や教師たちの切実な願いであったと思います。

最近では多動に適合する薬剤も開発され、指導法についても格段の工夫と進歩が見られている様ですが、地域的にはLD児の教育問題が、なかなか浸透しにくいところもあり、その理由の一半には、余程のことでもなければ障害児として認定して欲しくないという、世の親御さんたちの裏の感情が働いているらしくもあり、ここに、LD児の乳幼児保育と就学前教育の重要性が窺われると思われるのです。多様因、複雑な絡みを内包するLD問題の解決には、ソフト・ランディング、しかし、確実、迅速に浸透を図らなければならないのですが、それには家庭・学校・地域の正しい理解と親密な連携が鍵を握っていることは確かです。